

令和5年度〔自己評価報告書〕

学校番号	学校名	校長名
301	川崎市立 聾学校	中野 理佳

学校教育目標	今年度の重点目標
1 豊かな言語力と確かな基礎学力 2 自他ともに大切にすることと自主的に行動する力 3 心身ともに健康で、社会を生きぬく力	1 自己選択、自己決定ができる場、一人一人が活躍できる場、お互いに認め合える場を設定し、自尊感情を高める。 2 川崎市研究推進校中間報告会に向けた研究の推進及び、取り組みを通して聾教育のあり方等を理解・共有し、専門性の向上を図る。 3 引き続き、ギガスクール構想推進校として、GIGA端末の有効な活用方法等を探り、個々に応じた豊かな教育につなげる。 4 校内の情報保障環境について、教職員の共通理解を深める。 5 地域の関係機関等との連携を強化し、早期からの聾難聴児支援の役割を果たす。また、地域支援力のさらなる向上を図るとともに、学校間交流、居住地校交流を推進する。

評価項目	具体的な取組	成果と課題	具体的な改善策
1	自己選択、自己決定ができる場、一人一人が活躍できる場、お互いに認め合える場を設定し、自尊感情を高める。 ・授業内での発表、行事等で一人一人が活躍し、賞賛を受ける場の設定 ・体験することを大切にし、自己選択、自己決定が行える場を設定することで、自己固定感を高める活動 ・卒業生や、働く聾者の話を聞いたりするなど、将来に対するビジョンを持てるようなキャリア教育の推進	・授業行事等で発表し、賞賛を受けることで、一人一人が前向きに取り組む姿勢が高まっている。 ・学校教育推進会議や、寄付金の用途などに自分たちの意見が取り入れられ、具現化される経験などを通して、自分たちの生活を自分たちでよりよくしていくという意欲が見られるようになった。 ・身近にいる聾教員や、卒業生さらに社会で活躍する聾者の姿を見たり、話を聞くことによって、自分たちの将来像を具体的にイメージしたり、自分が何をしたいのかを考えたりする良いきっかけとなり、さらに自己肯定感を高めることにもつながった。	・幼児児童生徒が自分の考えを発信できる場、一人一人が活躍できる場の設定、自分の意見が反映されていることを実感できるような取り組みを行うために、さらに教員一人一人の意識を高め、実践していけるように各学部、学校全体で取り組む。 ・幼児児童生徒がより、自分の力を発揮できる授業や、行事の在り方の検討を続けていく。
2	川崎市研究推進校中間報告会に向けた研究の推進及び、取り組みを通して聾教育のあり方等を理解・共有し、専門性の向上を図る。 ・各部の研究推進 ・各部相互の研究内容の情報交換を行うため、校内でプレ発表会の実施 ・授業研究の推進	・中間報告に向けて、それぞれの部が一体となって、研究を行い、お互い授業を見合い、意見交換を行うこと、外部講師による、専門的なアドバイスを受けたこと等で、聴覚障害教育についての専門性を高めることができた。また、初任者や新着任者については、他学部の研究協議会にも参加し、学ぶことができた。研究授業のみならず、ベテラン教諭の授業の参観などを進めていくことが望ましいが、授業の関係などで難しい面もある。	・他学部の研究会への参加や授業を見合うための授業体制を作る。 ・研究会の講師の話を教員のクラスルームに上げるなどして、情報がより詳しく共有できるようにする。 ・聴覚障害の専門性だけでなく教科指導の専門性を同時に向上するため、小学校、中学校の研究会への参加も積極的に推進する。
3	引き続き、ギガスクール構想推進校として、GIGA端末の有効な活用方法等を探り、個々に応じた豊かな教育につなげる。 ・GIGA端末を使った視覚資料の提示 ・GIGA端末を使った授業改善 ・コミュニケーションツールとしてのGIGA端末	・用途に合わせてGIGA端末を使いこなせる児童生徒が増えてきた。 ・今年度は個別最適化に向けて、どのように端末を活用していくかを探り、説明する力、発信する力をつけてきた。 ・GoodNoteを、PDFのファイル保存や管理、ノートとしても活用できるように取り入れた。	・GIGA端末は、視覚情報を得るツールとして優れているが、その場で消えてしまう情報でもあるので、いかに記憶にとどめられるようにするか考える必要がある。 ・さらに深い学びにつなげるために、児童生徒の探求心を高めるような活用を目指す。 今後はGoodNoteを授業の中や、校務などでも効果的に活用できるようにサポートしていきたい。
4	校内の情報保障環境について、教職員の共通理解を深める。 ・口話、手話等多様な手段を使った校内コミュニケーションの推進 ・手話研修会、朝の打ち合わせにおける、ワンポイント手話、手話動画の配信等、教職員、幼児、児童生徒の手話力向上のための取り組み ・コミュニケーションマナー研修の実施	・聾の教員等が中心となり、手話の推進活動を行うことができた。聞こえない聞こえないに幼児児童生徒教員がいる環境で、手話を中心にお互いに様々なコミュニケーション手段を使い、みんなに伝わる工夫をしようと呼びかけており、意識は高まりつつある。 毎年度、新着人の教員のコミュニケーション手段の習得が課題である。	・引き続き聾の教員を中心に推進活動を進めていく。 ・聴覚障害の幼児児童生徒への伝え方、伝わっているかの確認等教職員全体で確認する。 ・日常の会話においても、常に聾者が共にいることを意識し、お互いのコミュニケーション能力を向上できるように協力し合う。

5	地域の関係機関等との連携を強化し、早期からの聾難聴児支援の役割を果たす。また、地域支援力のさらなる向上を図るとともに、学校間交流、居住地校交流を推進する。	<ul style="list-style-type: none"> ・乳幼児相談の充実 ・教育相談を受けた聴覚障害児が通園する、保育園、幼稚園との連携 ・障害理解授業の充実と活発な交流 ・聴覚障害教育のセンター校としての役割 ・居住地校交流の推進 ・学校間交流の推進 ・地域や企業との連携 	<ul style="list-style-type: none"> ・保育園や幼稚園からも要請を受け、引継ぎや障害についての認知活動を行い連携を深めることができた。また、連携を深めていこうとする動きが幼稚園や保育園に浸透しつつある。 ・居住地校交流では、障害理解授業を行ったり、回を重ねたりすることで、スムーズに交流ができるようになってきた。 ・地域支援としての要請等をうけ、各校の障害理解を深めるとともに指導者への助言等を行った。 ・聴覚障害の子どもたちは気づきにくい困り感を持っていることが多く、聴覚障害についての理解をさらに進めていく必要がある 	<ul style="list-style-type: none"> ・病院や療育機関、行政との連携を強化し、市内における聴覚障害児支援の拠点となるように、必要な基礎作りを行うことを継続する。 ・増加するST派遣依頼への対応を検討し、支援の充実を図る。 ・通級指導教室の巡回指導や居住地校交流、学校間交流などをさらに充実できるように推進する。 ・川崎市の聴覚障害教育のセンター校としての役割をさらに充実できるように、理解活動を進めていく。
6	業務改善 働き方改革	<ul style="list-style-type: none"> ・GIGA端末の活用、事前の会議資料配布 ・会議等の精選 ・月に1～2度のワークライフバランスデー（ノー残業デー）の設定 	<ul style="list-style-type: none"> ・職員会議の時間が短縮できた。 ・学部会、総務委員会、職員会議のそれぞれの持つ役割と意義について再確認を行い、各職員の意見を繁榮できることを確認した。 ・教職員の退勤時間に対する意識が高まり、全体的に退勤時間が早まった。 ・手話通訳者に欠員があるため、聾教員がいる学部の会議の日にちや時間をずらすなどの工夫を行っているが、日程調整が難しい。 ・家庭訪問期間や面談期間、成績処理などの時期には、時間外の労働が多くなってしまいがちである。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き、資料の準備や関係者との事前打ち合わせ等をしっかりと行う。 ・退勤が遅くなりそうな職員には声をかけ、お互いの退勤意識を高め合えるようにする。 ・部会や部の研究会等の組み方の工夫、会議の杜方等をさらに検討を重ねる。 ・研修会の持ち方や精選について協議をしていく。 ・家庭訪問期間や面談期間、成績処理の時期など二作業時間を確保するため、会議や研修を入れられない、授業短縮等による時間確保ができないか検討する。

学校関係者の評価	学校運営のまとめ
<p>学校評価アンケートで、保護者は、「実態を正確に把握し、適切に個別の指導計画が作成されている。」「先生はより良い授業を行うために創意工夫している。」の項目が、「とてもそう思う」「そう思う」を合わせて100%。その他にも「体験活動が充実」「好ましい人間関係」などの項目が95%越えをしていて概ね高い評価をいただけた。ただ、「ICT環境の充実による教育的効果が見られる。」は推進校となり手ごたえを感じている教員は高評価なのに対して、保護者は「よくわからない」の割合も高い。今後、周知をしていく必要を感じる。児童生徒は全項目で高評価だったことは何よりもうれしいことである。ただ、この評価結果だけに甘んじず、指摘された点については真摯に受け止め、より良い学校づくりのために改善していきたい。</p>	<p>今年度、学校教育目標を変更。それによって、各学部の教育目標、研究テーマなど、新しい学校教育目標に合わせて全教職員で見直しを行った。目指すものがよりはっきりしたことで、教職員全体の意識が統一されたと感じる。また、最重点目標である自己選択、自己決定ができる場、お互いに認め合える場の設定等は、普段の学校生活の中でも広がってきている。幼児児童生徒の社会を生き抜く力は何かを見極め、より、自己肯定感を高め、自信を持って、自ら行動できる幼児児童生徒を育てていきたい。</p>